「ピラトとイエス」（ルカ二三章一～二五節）

1　ピラトに訴え出る

「使徒信条」の中にただ一人名前の出てくる人間、それがピラト、ポンテオ・ピラトです。「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け・・・」。こういう形で名前が出ることは、もちろん不名誉なことです。ピラト自身はそんなこと予想もしていなかったでしょうけれど。

実際使徒信条全体の中で、彼の登場は少し場違いであり、そもそもイエスの名と並べて置かれるものではありません。とはいえイエス・キリストが宣べ伝えられるところ、どこでもピラトの名前はついて回るのです。

ある人は、それは使徒信条に日付を入れているのだといっています。そういってもいいかも知れません。イエスが、私どもも生きるこの時間の中で、あのとき、あそこで生き死にした、そのことを、「ポンテオ・ピラトのもとに」という言葉は、私どもにリアルに思い起こさせるものなのです。

先週は、イエスが捕らえられ、大祭司の家へ連れて行かれ、そこで開かれたユダヤの最高法院で尋問を受けた、そこまで私どもは聖書を読んだところでした。その審理は、これ以上の証言は必要がないといって、いわば打ち切られた形で終わっていました（七一節）。

イエスを殺そうとしていた人たちは、イエスを、ローマの官権に一刻も早く訴え出ようとしていたからです。というのもユダヤの宗教裁判では、たとえイエスを神冒瀆者として断罪できても、これを死刑にまでもっていくことはできなかったからです（ヨハネ一八・三一）。ローマに訴える、その点で、ユダヤの最高法院は、まったく思いを一つにしていたのです。

> そこで、全会衆が立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。そして、イエスをこう訴え始めた。「この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました」（一～二節）。

少しピラトのことを申し上げれば、イエスが郷里ガリラヤで伝道を開始する少し前に（三・一、二三参照）、ユダヤを治めるためにローマから来た地方行政長官です（在位 26-36 年）。中央から派遣された県知事のような人です。地中海沿いのカイサリアに館はあり、大きな祭りがあるときなど、いまは過越祭、徐酵祭ですが、治安維持のためエルサレムに来ていました。

彼の性格は残忍で、ほぼ同時代といってもいいユダヤ人歴史家ヨセフス（37～100年頃）の書いたものでは評判はよくありません。聖書にも一箇所、その痕跡があります。ルカ一三章一節に、「ちょうどそのとき、何人かの人が来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた」とあります。多くのガリラヤ人を神殿で殺害したということです。ピラトの前に立ったときイエスはもちろんそれをよく知っていたのです。

さて最高法院の「全会衆」は、ピラトに、イエスについてここで三つのことを訴え出ています。

一つは、イエスは、「わが民族」を惑わしたこと、二つ目は、皇帝に税を納めるのを禁じたこと、そして三つ目は、自分がメシアであり、王であると言っているということです。

これらは、訴え出たユダヤ人たちの言い分です。たとえば二番目の、イエスが皇帝に税を納めるのを禁じたということは、私どもも知っているように、間違いで、そういえばピラトは反応すると考えたのでしょう。彼らの願いは、いずれにせよ、イエスを、ローマの権力により、反逆者として処刑してもらうことです。これを受けて、ピラトは、イエスを尋問いたします。

そこで、ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」とお答えになった。ピラトは祭司長たちと群衆に、「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」と言った（三～四節）。

明らかなように、イエスに対するピラトの尋問は、ただ一つです。ユダヤ人たちが訴え出た三番目の告訴理由に関わります。お前がユダヤ人の王なのか。「お前が」という言葉が強調されています。ピラトの前にいま立っているイエスの姿は、これまで見てきた反逆者たちとはまったく違った印象を与えたようです。お前が！　驚くピラトが想像されます。

イエスの答えは、最高法院でのときと同じようなものでしたが（七〇節）、もとの言葉は違っています。最高法院では、そう答えて自ら神の子であることを認め、告白したのに対して、ここでは、肯定も否定もしない、むしろ答えることに意味を見いださなかった、といったらよいでしょうか。ピラトもこれ以上関わりたくないという思いがありありです。ユダヤの告発者らにすぐに向き直って「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」と無罪宣言をしてしまいます。

2　ヘロデの前で

なお食い下がるユダヤ人たちの言葉からピラトは、イエスがガリラヤ人であることを知ったようです。そこで彼は、日頃関係の悪いガリラヤの領主ヘロデが、祭りでエルサレムにいることを思いだし、これ幸いに、つまり明らかに責任を回避しようとして、イエスの処置をヘロデに押しつけようとしたのです。

彼はイエスを見ると、非常に喜んだ。というのは、イエスの噂を聞いて、ずっと以前から会いたいと思っていたし、イエスが何かしるしを行うのを見たいと望んでいたからである。それで、いろいろと尋問したが、イエスは何もお答えにならなかった（八～九節）。

「彼はイエスを見ると」。彼とは、ヘロデ大王の息子の一人で、当時ガリラヤの領

主であったヘロデ・アンティパス（前4-後39年在位）です。彼も残忍で聞こえ、ご存じのように、自分の姦淫をバプテスマのヨハネに責められて、ヨハネを殺害した人です（九・九、マタイ一四・一以下）。

この残忍で、いかにも軽薄なヘロデについては、ヨハネ殺害の後のことも聖書はいくつか記しています。

それによると、ヨハネを殺した後、すでに宣教を開始していたイエスの目覚ましい活動を耳にし、一度会ってみたいと思ったというのです（九・七以下）。その際イエスについてバプテスマのヨハネが生き返ったのだという噂に、ヨハネなら「わたしが首をはねた。いったい、何者だろう」というなど、ヨハネ殺害など何の痛みをもっていないことが明らかです。その彼は、イエスが何か奇跡をするのを見たいものだというのです。

何か底知れない悪の深さを感じます。ヘロデをおおう闇の暗さは、彼が自分の兵士とともに、イエスをあざけり、侮辱したあげく、派手な衣を着せてピラトに送り返したところに現れています。夜中引き回され、着ているものは汚れ、イエスの肉体の疲労もすでに限界をこえています。彼に何か裁きが下ったわけでもありませんし、判決が出たわけでもありません。尋問の最中です。それゆえ無抵抗です。その人になされるヘロデらの行為をこそ、暴力というのでしょう。暴力を加えた上で彼はイエスをピラトに送り返します。

3　十字架への道

さて十字架へとつながる、イエスの最後の裁きがはじまります。この裁きも、最初のピラトによる尋問のとき（一～五節）がそうであったように、建物の中か外かは分かりませんが、公開でなされたようです。というのもそこに最高法院だけでなく民衆も呼び集められているからです。

> ピラトは、祭司長たちと議員たちと民衆とを呼び集めて、言った。「あなたたちは、この男を民衆を惑わす者としてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。ヘロデとても同じであった。それで、我々のもとに送り返してきたのだが、この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう」（一三～一八節）。

ピラトによるイエスの最後の裁判の全体を読むと、ピラトは、イエスについて死刑に当たる犯罪は何も見つからないと、じつは三回も言っています。非常に印象深いことです（一四、二〇、二二節）。

これだけ取り上げれば、ピラトは、イエスに味方した、何とか助けようとした、とてもいい行政官、裁判官に見えてきます。

今から一〇年ぐらい前でしょうか、ドイツのオーバーアマガウ村の受難劇のシナリオが問題になったことがありました。覚えていらっしゃる方もおられると思いますけれど。シナリオがイエスの殺害の責任をユダヤ人だけになすりつけているというアメ

リカのユダヤ人から苦情が出されたのです。それを受けて、ピラトの責任や関与も重くするように書き換えた、簡単に言えば、そういうことが大きな話題になったことがありました。

とくにこのルカによる福音書はピラトが善意の人だったような印象を私どもに与えるものです。しかしそれは、一見するとそう見えますが、決してそうでないことを知らなければなりません。というのも、せっかく三回も、イエスはローマにとって無罪という裁判官としての確信を披瀝し、提起しながら、結局その都度、だんだん大きくなる「人々」の声に押されて、妥協し、最終的には自分の裁判官としての責任を完全に放棄しているからです。

しかし、人々は一斉に、「その男を殺せ。バラバを釈放しろ」と叫んだ。（一九節）。

しかし人々は、「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫び続けた（二一節）。

ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。その声はますます強くなった。そこで、ピラトは彼らの要求を受け入れる決定を下した（二三～二四節）。

むち打った上でですが、ともかくイエスを釈放しようというピラトの提案、その中の「釈放」という二文字は民衆に刺激を与えます。祭りのたびに囚人一人に恩赦を与える慣行を今年も実行するように、そしてバラバを釈放するようにという激しい要求となったのです。

マタイによる福音書を見ると、バラバは家名で、名前はイエスでした。（二七・一七）。バラバ・イエスと、メシア・イエス、どちらのイエスを釈放したいのかというピラトの言葉が記録されています。人々はイエスと同じガリラヤ出身で、熱心党、「暴動と殺人のかどで投獄されていた」バラバ・イエスの釈放を要求したのです。それならもう一人のイエスはどうすべきか、それは、バラバが本来つけられるべきであった十字架に、代わってつければよいではないか、これでイエス・キリストの十字架は決まったのです。

一見するとピラトはいい人、ではないのです。彼がしたことは裁判官としての良心も確信も捨てたことであり、法の番人が法を曲げたことであり、民衆を後押しする祭司長、長老たち、その背後のサタンにすべてをゆずり渡すことであったのです。「暴動と殺人のかどで投獄されていたバラバを要求通りに釈放し、イエスの方は彼らに引き渡した」（二五節）。この取り替えという結末は、あまりに痛々しいものです。

使徒言行録は、ヘロデもピラトも異邦人とイスラエルと一緒になってメシア・イエスに逆らった、そして神はみ手とみ旨によって、あらかじめ定められていたことを成し遂げられたと書いています（四・二七～二八）。それは、罪なき方が、罪人のために、罪人に代わって神に裁かれる道を歩むことでした。これがイエスの十字架への道の意味でもあるのです。

（二〇二一・三・一四）